

ウィンブルドン

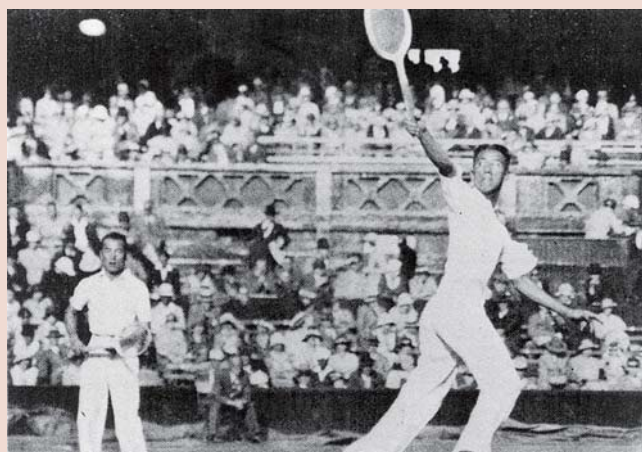
最古で最高の グランドスラム大会

1877年に出場22人の男子シングルスだけで始まったウィンブルドン選手権(全英選手権)は、世界最古のトーナメントであり、テニス史の変換点の舞台でもあり、そして日本選手が最も活躍してきた四大大会でもある。

現在の男子ツアーを運営するATP(プロ選手協会)がその存在感を示したのもウィンブルドンだ。ウィンブルドンは75年からATPのコンピューターランキングをドロー(組み合わせ)作成に採用。この後、各国が大会のドロー作成に用いるようになる。こうした一連の動きはATPの権威が高まる契機になった。

どの時点から日本人選手が参加していたかは不明だが、周知されているのは、20年の清水善造である。軟式流でウィンブルドンに出場。いきなりオールカマーズ決勝まで駆け上がった。まず前年優勝者への挑戦者を決めるトーナメント、「オールカマーズ」を行い、その勝者だけが、チャンピオンに挑戦できる「チャレンジラウンド」システム。清水はオールカマーズ決勝で世界的選手ビル・チルデン(米国)に4-6、4-6、11-13で敗れたが、現在で言えばベスト4あるいは3位相当の好成績である。

清水の後、活躍するのが佐藤次郎である。その存在が世界に認められるのは32年大会である。準々決勝で前年チャン



佐藤次郎と布井良助 ミュージアム収蔵写真より

ピオンのシドニー・ウッド(米国)を7-5、7-5、2-6、6-1で破る金星を挙げた。翌33年、快進撃を演じた。準々決勝で、前年敗れたヘンリー・オースティン(英国)に7-5、6-3、2-6、2-6、6-2で雪辱。準決勝では当時世界ナンバーワンのジャック・クロフォード(豪州)に3-6、4-6、6-2、4-6で敗れたが、2年連続ベスト4で、全



清水善造とビル・チルデン ミュージアム収蔵写真より



三木龍喜とドロシー・ラウンド

ミュージアム収蔵写真より



沢松和子とアン清村 ミュージアム収蔵写真より

仏4強を加え、四大大会2大会連続の準決勝進出。同年末の世界ランキング3位に躍進した。

さらにダブルスがある。布井良助と組んで強敵を撃破し、決勝に進んだ。決勝はポロトラ、ブルニョンのフランス四銃士ペアに6-4、3-6、3-6、5-7で敗れ、日本選手初のメジャー栄冠はならなかった。軟式で基礎を作った重厚なストロークの佐藤と、俊敏なネットプレーができた関西出身の布井のペアは世界に通用するペアだった。

ウィンブルドンの優勝カップは、翌34年、デ杯選手の三木龍喜がドロシー・ラウンド(英国)と組んだ混合ダブルス決勝で逆転勝ちし、日本選手として初めて掲げた。これが日本勢初のメジャータイトル獲得だった。

日本男子選手は第2次世界大戦の敗戦から、海外遠征はデ杯などに限定され、ウィンブルドンには戦後しばらく姿を見せられなかった。そして68年のオープン化による世界の急激な進化に後れを取る。ようやく松岡修造がサーブ力を生



松岡修造 写真撮影：田沼武男

かして、96年に佐藤次郎以来のベスト8に進んだ。期待の錦織圭も故障が重なり、グランドスラム大会ではウィンブルドンだけ、準々決勝にも進んでいない。

戦後、めざましい活躍を示したのが女子だ。54年、加茂幸子が日本女子選手で初出場してシングルス3回戦まで進出。そして日本女子初のトーナメントプロとなった沢松和子が75年、日系米国選手アン・清村とのペアで、女子ダブルスで日本女子初の栄冠を獲得する。決勝はベティ・ストーブ(オランダ)、フランソワーズ・デュール(フランス)ペアに7-5、1-6、7-5と競り勝った。腰痛のため現役引退を決めていた年だが、何年も続けた海外遠征のつらい経験を大舞台で実らせた。

この後、伊達公子が大きく羽ばたく。92年からシードが付いたが、96年、遂にベスト4に進出。4回戦でコンチタ・マルチネス(スペイン)、準々決勝でマリー・ピエルス(スペイン)と上位シードを連破して、準決勝の相手はシュテフィ・グラフ(ドイツ)。この年のフェドカップで破った相手との決勝進出をかけた戦いは、第2セット終了で日没順延。2日かかりの熱戦となり、2-6、6-2、3-6で敗れ、初の決勝進出を逃した。2日目の最終セットはNHKが午後7時のニュースを取りやめてライブで中継するなど、国民の大きな関心を呼んだ。

伊達引退後は杉山愛が台頭。2003年にキム・クライシュテルス(ベルギー)とのペアで沢松以来の女子ダブルス優勝を遂げる。杉山は2000年から07年にかけて女子ダブルスは5度決勝に進んだ。シングルスでも04年に準々決勝まで進出、その年優勝するマリア・シャラポワ(ロシア)を追い詰めながら、7-5、5-7、1-6と逆転を許し、伊達に続くベスト4を逃した。

文・小沢剛(共同通信社)



伊達公子 ミュージアム収蔵写真より

全仏オープン

オープン化第1号

5月のパリの青空。ブローニュの森の緑。ローランギャロスの赤土。カラフルで透明な季節の中のグランドスラム。それが全仏オープン。しかし、戦いは、果てしない忍耐力とパワーに裏打ちされた心身ともタフな選手たちの舞台である。同時に日本選手には総じて厳しい結果を突き付けられてきたステージ…。

1891年にパリの「スタッド・フランス・クラブ」で男子シングルスだけで始まった「フランス選手権」は6年後に女子を加え、1925年に参加条件が大幅に緩和される。それまではフランス人かフランス在住外国人しか出場資格がなかったが、この年から外国有力選手にも門戸を開いた。「フランス国際選手権」の誕生である。ブルニョン、ポロトラ、コシエ、そしてラコステの「四銃士」が活躍、デ杯は27年から6連覇、四大大会シングルスもこの時代計18勝も挙げている。米国とのデ杯決勝へ向けて建てられたのが、ローランギャロスなのである。

国際化以降、佐藤次郎が大暴れする。31年、デ杯遠征の一環で出場して初のベスト4。33年には準々決勝で英国の英雄、フレッド・ペリーを破り、2度目のベスト4に進んだ。準決勝で世界ナンバーワンのジャック・クロフォード（豪州）

に屈して決勝進出を逃したが、全仏2度の4強進出は男女を通じて日本選手最多である。

戦後の日本勢は男子より女子の活躍が目立つ。沢松和子が69年にジュニアを制し、75年にベスト8。準々決勝でクリス・エバート（米国）に敗れた。沢松のめい、沢松奈生子は91年の1回戦で前年のウィンブルドン準優勝者、ジーナ・ガリソン（米国）をストレートで破り、ベスト16。そして95年、第9シードで登場した伊達公子が4回戦で第7シードのリンゼイ・ダベンポート（米国）、準々決勝で第12シード、イバ・マヨリ（クロアチア）をいずれもストレートで連破、ベスト4に進んだ。準決勝ではアランチャ・サンチェスビカリオ（スペイン）に敗れたが、これが日本女子の最高成績である。

男子は74年に神和住純が初戦でスタン・スミス（米国）を破るなど「スポット」的金星はあったが、何試合も勝ち上がることは難しかった。だが、2015年、錦織圭がベスト8に進み、戦後の最高成績をマークした。日本男子が苦手としてきたクレイコート、テンポの速い展開で克服した。

世界的に見れば、1968年の国際庭球連盟（現国際テニス連盟）のオープン化容認を受け入れた最初のグランドスラム大



佐藤次郎 ミュージアム収蔵写真より



三木龍喜 ミュージアム収蔵写真より

会である。74年から81年までに6度のタイトル獲得のビョルン・ボルグ（スウェーデン）が登場。同時期にウィンブルドン5連覇を達成し、世界のスーパースターに輝いた。その後、イワン・レンドル（チェコスロバキア）、マッツ・ビルンデル（スウェーデン）、アジア系男子初のタイトルホルダー、89年のマイケル・チャン（米国）らが勝ち、さらに南米、スペインなどのクレイコートスペシャリストが君臨する時代を迎えた。その頂点に立ったのがラファエル・ナダルだ。スペインのマジョルカ諸島出身のサウスポーは初出場だった05年から、4回戦で姿を消した09年を除くと14年まで9度

の優勝を数えた。ローランギャロスはナダルの庭だった。

オープン化後の女子は、マーガレット・コートとイボンヌ・グーラゴングの豪州勢の時代の後、両手打ちのバックハンドから正確なストロークを繰り出すエバート、フォアハンドのシュテフィ・グラフ（西ドイツドイツ）、モニカ・セレス（ユーゴスラビア）、サンチェス、ジュスティヌ・エナン（ベルギー）らがタイトルをさらい、11年には李娜（中国）がアジア選手として男女を通じて初のグランドスラム優勝を果たした。



神和住純

1974年の全仏1回戦で、神和住はスマイスを破る大金星をあげ（左）、その後ロッカー・ルームで英国の有名なテニス記者、ピグノン氏からインタビューを受けた（下）



沢松和子

74年全仏3点、モダンテニスNo.29 撮影：川廷栄一



錦織圭 写真撮影：武内勝

全米オープン

日本選手、四大大会事始め、戦後の栄冠、オープン化後の最高成績

恐らく四大大会に初めて日本選手が参加した大会だ。時は第1次世界大戦中の1916年。日本庭球協会（現在の日本テニス協会）創設以前の時代である。米国遠征中の熊谷一彌が出場して初戦を突破した。熊谷のフォアハンドは軟式流の厚いグリップのままで、これが強烈なトップスピを生んだ。生前の同氏を見知っている宮城淳元日本テニス協会専務理事は「ストロークの強さは、現代ならナダルに相当する」と語った。この年、全米5位にランクされた。

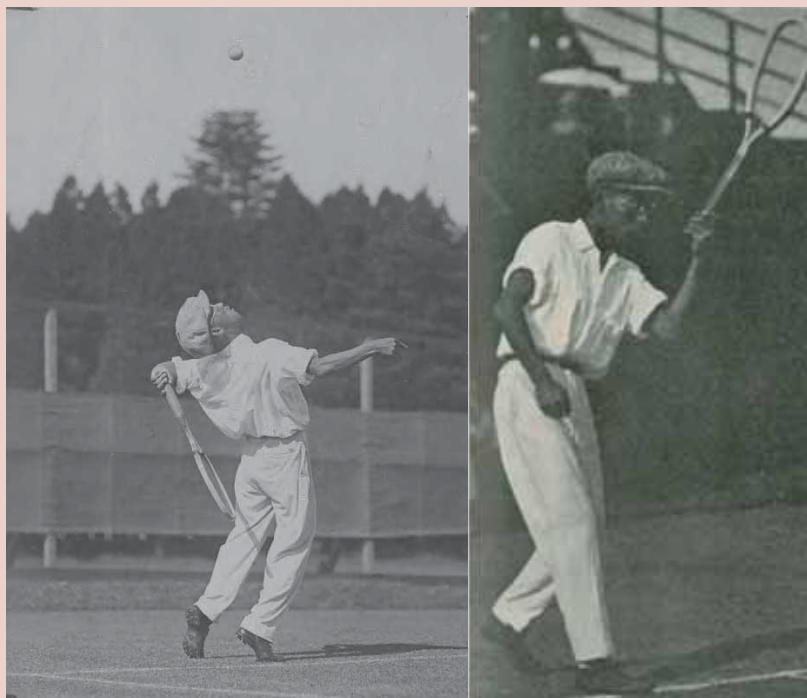
17年に三菱合資会社銀行部（現三菱東京UFJ銀行）入行。翌年、ニューヨーク転勤を命じられる。その背景には、当時の米国で吹き荒れていた日本移民排斥運動と黄色人種が白人を圧迫するという「黄禍論」緩和の役割への期待があった。日本の経済界上層部にスポーツ、特にテニスが上流階級に及ぼす影響を考えた結果と、遺稿集に記されている。熊谷は見込み通り、18年から20年にかけて米国ランキング7、3、5位と大暴れする。いくつかの州選手権に加えて全米選手権では準決勝まで勝ち進み、ビル・チルデン（米国）に敗れた。翌年は全米選手権4回戦でフルセットまでもつれたが、またもチルデンに敗れた。

熊谷と並ぶ同時代の両雄、清水善造は22年に全米に回りベスト8。

第2次世界大戦に敗れた日本にとって、全米は遠かった。しかし、戦後唯一の栄冠をこの大会で挙げる。55年デ杯東洋

ゾーン決勝でフィリピンを破った日本はカップ保持国、米国で開かれたインターゾーンに進出。初戦で豪州に敗れるが、宮城淳、加茂公成はそのまま滞在。当時、全米はシングルスとダブルスは日程も場所も別開催だったが、その全米ダブルス選手権（現在の全米オープン男子ダブルス）準決勝で宮城・加茂組は英国のデ杯ペアに苦戦。4-6、11-9、6-4、3-6で迎えた最終セットは1-5で相手サーブ。芝コートの点を考えても絶体絶命だ。ここで開き直った。「99%負け。ロブでも上げてみようや」（宮城）。これが当たる。勢い込んでネットへ突進する相手の背後にレシーブで絶妙なロブを落とし、逆にネットを奪って攻めた。続くポイントでもロブで攻め立て、英国ペアの勢いをそぎ、8-6で大逆転を収めた。決勝は翌年デ杯に選ばれる米国のホープが相手だったが、前哨戦で2度勝ったこともあり、競り合いながらも6-2、6-3、3-6、1-6、6-4で退けた。日本の男子選手が戦後の四大タイトルを獲得したのは、この1度きり。この年の全米ダブルスはハリケーン来襲による雨で日程が大幅順延、デ杯決勝と重複し、米豪のトップ不在の幸運に恵まれた点もあった。

68年のオープン化に伴い、日本は長期低迷期に入った。男子で打破したのが錦織圭。14年の全米オープン。足の故障明けだったが、4回戦でライバルのミロシュ・ラオニッチ（カナダ）、準々決勝で全豪チャンピオンのスタン・バブリンカ



熊谷一彌のアメリカンツイストサーブとフォアストローク
ミュージアム収蔵写真より



宮城淳と加茂公成
ミュージアム収蔵写真より



ウェストサイドテニスクラブ（フォレストヒルズ）

(スイス) にいずれもフルセットで競り勝ち、そして準決勝で世界ナンバーワンのノバク・ジョコビッチ (セルビア) を 6-4、1-6、7-6、6-3 で破って、日本男子選手で初めてグランドスラム大会のシングルス決勝に進んだのだ。決勝ではマリイン・チリッチ (クロアチア) のサーブカの前に

3セットとも3-6で敗れ、史上初の四大大会制覇を逃した。

日本女子はベスト8が壁となった。75年、現役引退前の沢松和子が準々決勝でイボンヌ・グーラゴング (豪州) に惜敗、93、94年の伊達公子、2008年は浅越しのぶが8強で姿を消した。



クーパー (豪) と対戦する坂井



全米初出場の沢松和子 3点ともモダンテニス No.18 撮影 川廷栄一

全豪オープン

日本選手初の 四大大会決勝進出

1905年に始まった全豪選手権に日本選手が初めて出場したのはアデレードで開かれた32年大会だった。32歳の原田武一と、24歳の佐藤次郎、23歳の布井良助。31年来日した豪州テニス界幹部が招待した。

当時の全豪は選手数も少なく、日程は1週間。佐藤はベスト4に進み、準決勝の相手はホップマン。6-0、2-6、3-6から第4セットは0-3と劣勢になったが、ここから巻き返して6-4でセットオールに。しかし最終セットは4-6で屈した。

だが、佐藤はオハラウッド（豪州）と組んだ混合ダブルス決勝でクロフォード夫妻ペアにフルセットの接戦を演じた。8-6、6-8、3-6で逆転負けし、タイトルには届かなかったが、日本選手初の四大大会決勝進出だった。

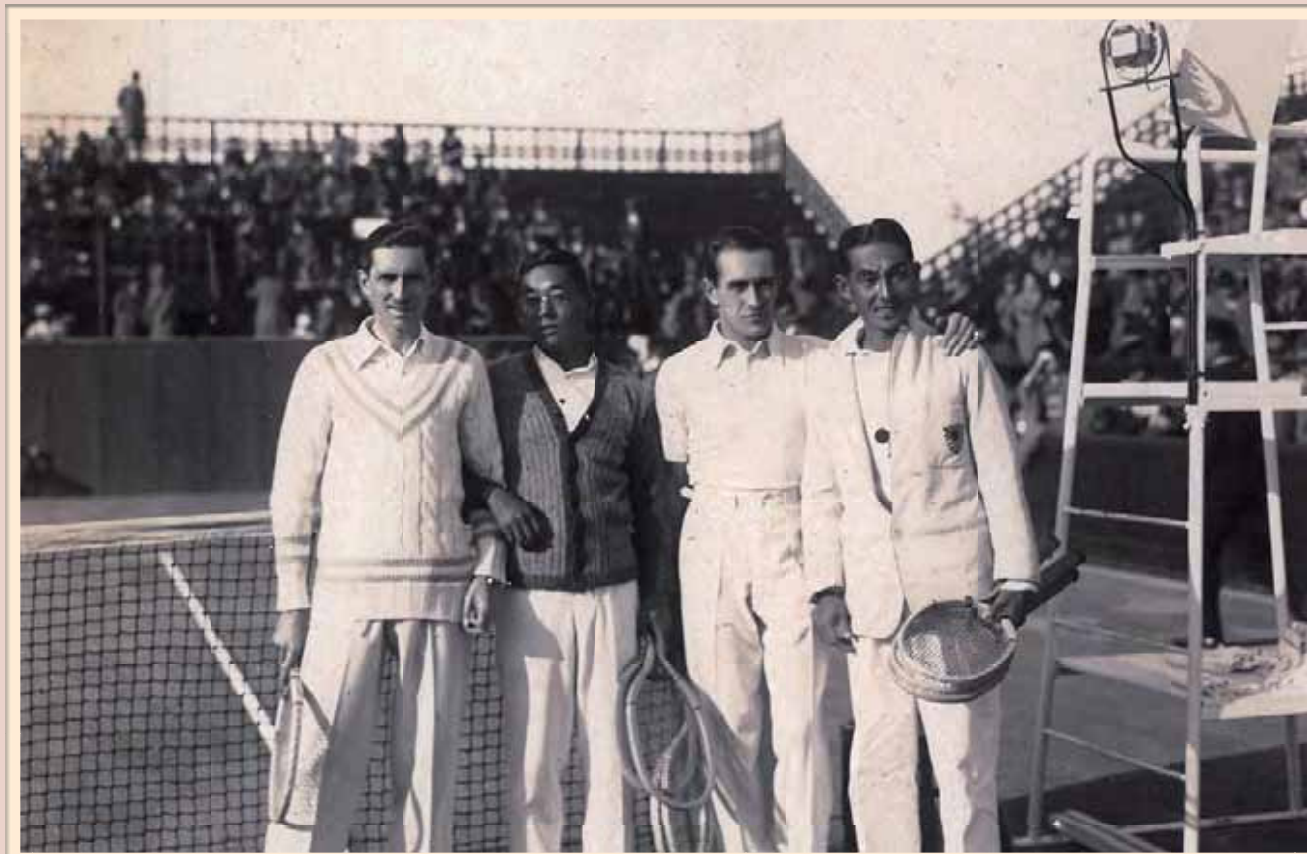
布井はシングルス準々決勝で、原田はダブルス準決勝で、優勝したクロフォード組に敗れた。

佐藤は豪州から渡欧し、この年、ウィンブルドンで初のベスト4。布井も翌年、佐藤と組んでウィンブルドンのダブルス準優勝。世界を回って腕を磨く、の言葉が文字通り生きていた時代である。

日本選手の全豪での活躍は、戦後に移る。69年にオープン化する4年前、男子ダブルスで石黒修・渡邊康二組が第8のシードを守って8強入り。地元紙によれば、日本ペアは芝コートで初のダブルスだったそうだが、この年の全仏を制する豪州ペアに5-7、10-12、3-6と善戦。前年のウィンブルドン・ダブルス優勝のストールは「サーブが素晴らしく、稲妻のようにすばやく動き、決して挑戦をやめなかった」とたたえた。

この後、男子の活躍は錦織圭の出現まで待つことになる。2012、15年にベスト8。12年はアンディ・マリー（英国）、15年はスタン・バブリンカ（スイス）に敗れたが、早いコートカバーと展開力の早さから近い将来、最後の日曜日（決勝）に笑える日が来るはずだ。

全豪は日本女子にとって好成績につながりやすい舞台だった。1973年、沢松和子が準々決勝で第3シードのバージニア・ウェード（英国）を逆転で破りベスト4に進んだ。準決勝はイボンヌ・グーラゴング（豪州）に敗れたが、四大大会の4強は彼女にとってシングルスでは最高の成績である。彼女のめい、沢松奈生子は95年にグランドスラム大会唯一



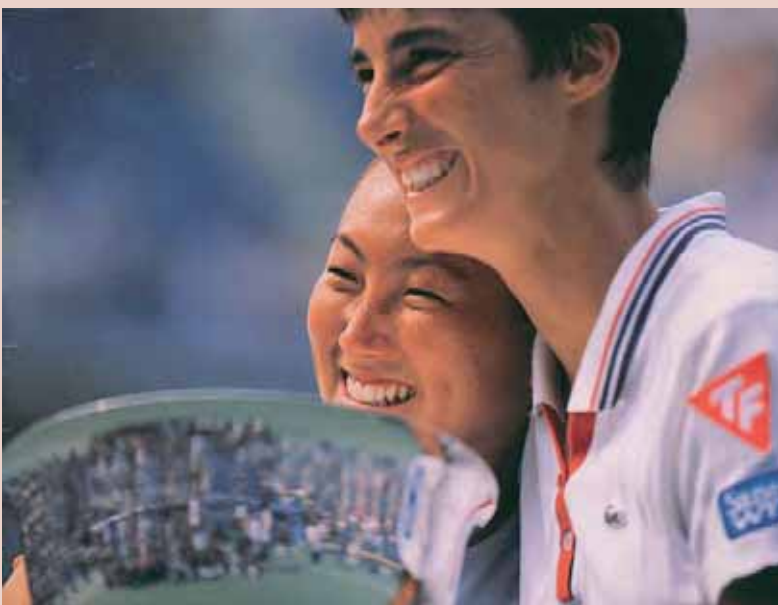
1929年デ杯3連覇中のフランス選手を迎えて左より
ジャック・ブルニヨン、熊谷一彌、アンリ・コシェ、原田武一 ミュージアム収蔵写真より



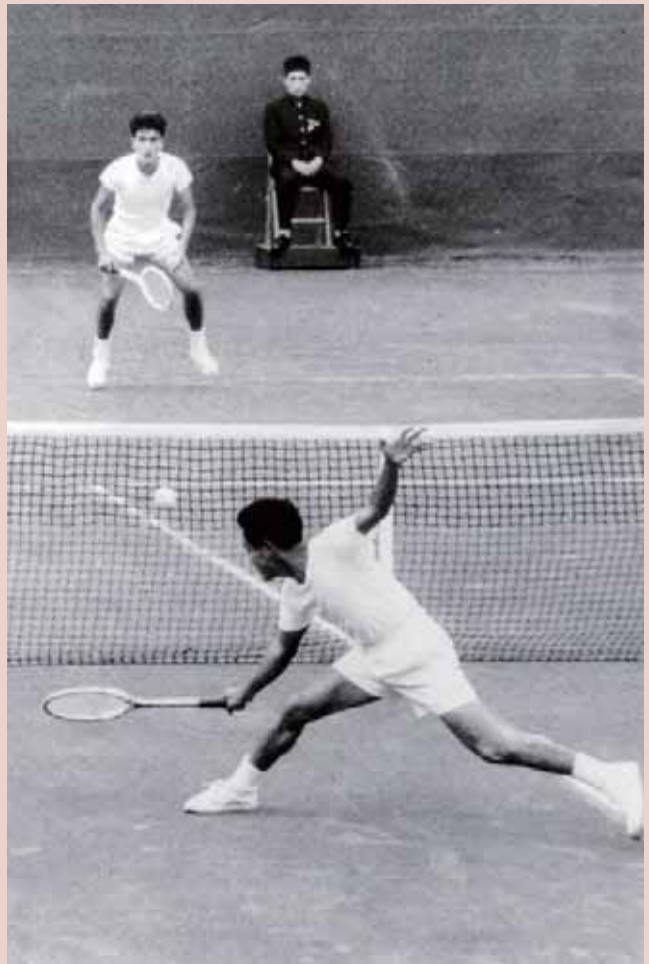
渡邊康二 ミュージアム収蔵写真より

の準々決勝進出を果たした。この年、阪神淡路大震災で西宮市の実家が被災。大会出場を切り上げて帰国する、と電話で訴える奈生子に「プロは親の死に目にも会えない。それくらい真剣にやるもの。帰りたいなら泳いで帰ってきなさい」と、ツアープロ第1号の叔母はプロ選手の自覚を促し、結果的に8強に結びついたといわれる。

沢松和子以来のベスト4を達成したのが、94年の伊達公子。第10シードで出場し、準々決勝で第3シードのコンチタ・マルチネス（スペイン）をフルセットで破った。彼女に



杉山愛とジュリー・デキュジス (仏) 写真撮影：田沼 武男



石黒修とアンボン (比) ミュージアム収蔵写真より

とって翌95年の全仏、96年のウィンブルドンと3年連続のメジャー大会ベスト4の第一歩だった。09年の杉山愛はダニエラ・ハンチュコバ（スロバキア）とのペアで女子ダブルス準優勝。ビーナスとセリーナのウィリアムズ姉妹（米国）に敗れたが、もし勝っていれば杉山にとってダブルスの生涯グランドスラム達成だった。



遠藤愛 1994.1 写真撮影：テニスクラシック山岡氏